慶蔵院寺報
公孫樹
2024年４月発行
第147号
浄土宗慶蔵院
伊勢市小俣町元町 1211
℡０ん５９６（22）3726

慶蔵院　子ども会　画　山寄淑子

ご縁がとりもつ二人の友情…

正之さんの友達は山本君である。年齢が離れているので、山本君は、正之さんのことを「お兄ちゃん」と呼んでいる。相次いで両親が亡くなり、施設に入っていた奥さんも亡くした正之さん。その「お兄ちゃん」を支えて、山本君は、お葬式を采配してくれた。年忌も忘れることなく、ふたり一緒にお参りする。車の運転は山本君の仕事。

「ご近所の皆さんに良くしてもらっています。僕にまで御礼を言ってくれますが、御礼を言わんならんのはこちらです」と山本君。もともと山本君は正之さんの弟の健治君の友人だった。ハローワークで誰かにからまれて難儀している健治君の間に入ったのがきっかけで友達になった。「家に遊びに行くと『お母さん』が大事にしてくれた」。山本君は、「おかあさん」と呼ぶ。

「『あんたは、川で溺れて死んだ三男の生まれ変わりのようや…』と初めて会った時に言われました。ちょうど僕も離婚したばかりで、一人だったので…嬉しかったです。『コメあるんか』とお父さんは、三十キロ袋なり持たせてくれるんです。家族の一員のように大事にしてもらってきました」

「健治君が倒れ心肺停止状態になった時『もう一回お願いできませんか』とお兄ちゃんがお願いしたら、また心臓が動き出して…、健治君の命を救ったのはお兄ちゃんや…。社会福祉協議会に相談して、寝たっきりになっている健治君には、後見人の方についてもらうことができたので安心です。」

「お兄ちゃん、料理がとても上手です。お母さんが一人になった時のために、しっかり料理作りを教えてくれてきたのです。お兄ちゃんがつくる≪肉じゃが≫は最高です。」

先日、法事の後で、正之さんが六十九歳の誕生日だと聞いて、三人で食事に行った。そのとき二人が演歌歌手、水森かおりのファンだと聞いた…。

後日「コンサートに行ってきた」と土産を届けてくれた。嬉しかった。

「今度二人のことを公孫樹に書いてもいいか…と聞くと声をそろえて、笑顔で「いいです」と応えてくれた。

4月の行事予定

３日（水）	写経会 男性詠唱隊	午前１０時～ 午後７時 30 分～
７日（日）	花まつり・子ども会	午前１０時～
８日（月）	華道「山村御流」教室 講師　小森清真先生	午後１時半～ 参加費 2000 円　と　花代
10 日（水）	落語会「いちご亭」 南遊亭栄歌・安楽亭東風	午後７時～　一会館にて
17 日（水）	健康教室　歩き方教室 講師　馬場久美子先生	午後１時～３時 参加費 500 円
６日・20 日（土）	絵画サロン 講師　山寄淑子先生	午後７時～８時半　一会館にて 参加費１回５００円
24 日（水）	地蔵講・地蔵堂開帳	午後１時半～
25 日（木）	戦没者慰霊平和の鐘	朝の勤行にて　午前８時頃
11 日（木）	ともいき英語サロン 講師　三浦邦昭先生	午前１０時～１１時半 午後１時半～３時 一会館にて　参加費１回１０００円
12 日・26 日（金）	茶道教室　講師　河井宗恵生 樋口宗恵先生 田島宗紀先生	午後７時～子供茶道教室 ７時半～大人茶道教室 大人５００円　一会館にて

慶蔵院豆知識 pt2 ⑪

一色能観覧記

去る三月十七日(日)に、一色町公民館で上演された一色能を見にいって来ました。

一色町とはどういう所かと申しますと、伊勢市内の町で、国道二三号線小木町交差点（ララパークのある所）を神社港方面へ曲がって直進し一色大橋を渡った所にあります。勢田川と五十鈴川に囲まれた趣きのある町です。公民館は橋を渡って坂をぐるっと回っておりて防潮水門の近くの案内看板に従って町内の方に入って行くとあります。車は水門の所の公園に止めることができます。十一時開演の前に公民館に着き、住所と名前を記帳し資料を二部いただき、会場の椅子に座って待ちました。舞台は本格的な物ではなく学校の体育館の様な所に、正面奥に松が描かれた響板があり、橋掛かりのかわりに舞台左隅に竹で欄干を作りそこに松の枝を三本立て掛けてありました。ただ舞台の床は本格的な物と遜色なくよく響きました。又正面前の端に御神酒が添えられていました。五百年の伝統を護る一色能は、毎年三月の一色神社例祭に奉納された後の日曜日に公民館で行われるそうです。

最初の演目は翁で、まず神楽が行われ、四方拝、四方堅めを行って舞台を清めてから、主演の太夫は舞台の上で面を付けてから祝言の謡と舞で世を寿ぎ、舞台上で外します。普通舞台上で面の付けはずしはしません。次に仕舞と吟、狂言と続き、最後に羽衣の一部を面と能衣装を付けずに主役と囃子と地謡のみで演じられました。有意義な時間を過ごせました。

（文　麻畑公生）

戦争の記憶 ③

私の戦争体験です。

昭和二十年学童疎開（石川県）から帰り、家族も大阪から伊勢の地に移ってきました。伊勢市内が空襲で焼かれ、母の兄一家も加わって大勢で住んで居ました。

伊勢市内によく爆撃機が飛んできました。不安な日々でした。

学校は警戒警報が出ると家に帰るように言われ、急いで家に帰ります。途中爆撃機が近づいて来て危ないので麦畑に入り、目と耳をおさえて土の上に伏せます。爆撃機をやりすごしてから家に帰ります。もう一度は家の中に居た時です。窓を開けていたので見えたのか、部屋の中に打ち込んできました。その時素早くかわしたので、タマは当たらず畳がはげしくめくれ上がりました。

その時のことを今も思い出します。危なかったなあと。

（江崎啓子）

昨年九十四歳で亡くなった母は、よく学徒動員等戦争体験を話してくれました。書いて残してくれと頼みましたが、とうとうそれはかないませんでした。もう戦争体験を話してくださる方は少なくなってきました。

是非、聞き書きでよろしいので教えてください。

地蔵堂の縁起

小俣町史によると、地蔵堂が建てられたのは、享保四年（一七一九）八月とある。山田にあった祥永寺の住職が身代地蔵尊を寄付し、堂に安置したという。さらに安永二年（一七七二）に修復がなされたようで「棟板」が残されている。「南無延命地蔵菩薩と記され、役人―奥山甚右衛門・肝煎―孫重郎。総代―長次郎。組頭―五郎七の名前が残されている。

この記録からわかるように、地蔵堂に祀られてきた地蔵菩薩坐像は、身代り・延命地蔵尊である。ご利益をいただきたいものです。寄木造の体躯二十二センチという小さなお地蔵さんではあるが、立派な台座に座っておられ、金箔は落剝し漆黒の状態となっている。

どうぞお参りください。

朗読落語いつも本堂人あふれ

奥田　悦生

（「知恩」四月号「柳壇」に掲載）

落語会「いちご亭」

第2水曜 10日　午後7時　慶蔵院「一会館」　無料です

出演　法話　慶蔵院住職

落語　南遊亭栄歌　安楽亭東

住職の健康回復への道のり（26）

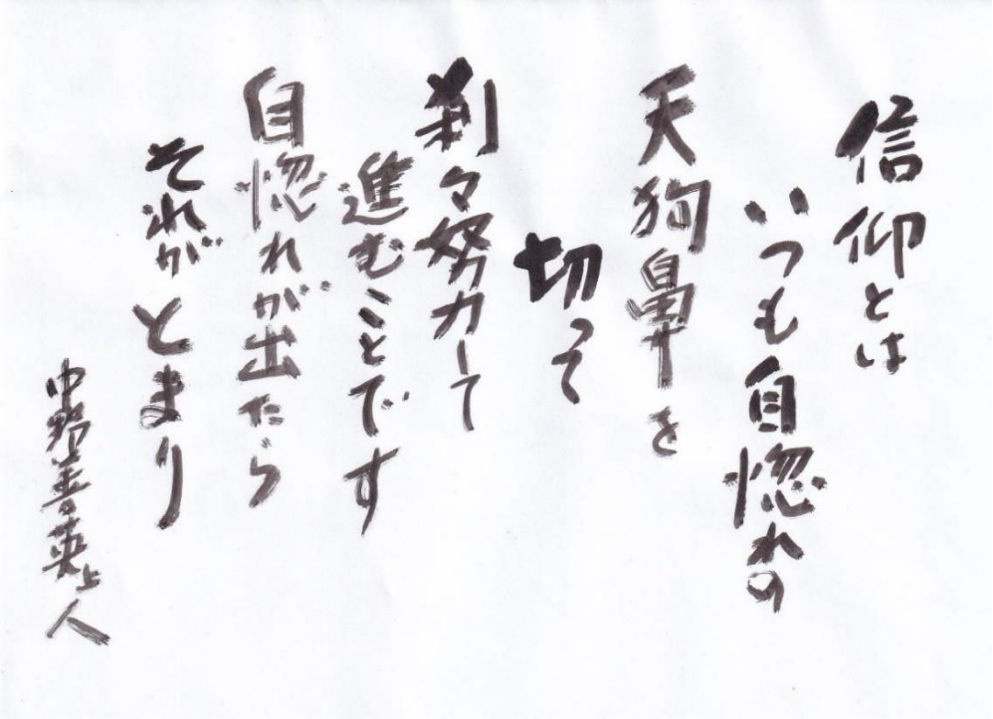
人の体は、自分で復元する力を持っているということを実感しています。先日の血液検査結果では、すべての数値が基準範囲内におさまりました。

基準値も、一つのバロメーターにすぎないと思いますが、何しろ気持ちよく、元気に仕事をさせてもらえるように回復できたことは、ありがたく嬉しいことです。痛みが出ることがあっても「自分で見つめよ。

麻畑公生の「浄土宗新聞」見どころ・読みどこ

４月号は、１ページの浄土宗開宗 850 年でしょう。夢の中で善導大師と法然上人が対面された絵が素晴らしいです。法然上人行状絵図第七巻第五段に書いてあります。青くすんだ川が北から南へ流れており、両岸で法然上人と善導大師が対面しています。東に法然上人、西に紫雲の中から現れた善導大師がいます。紫雲の中から無量の光が放たれ、周りには孔雀や鸚鵡などあらゆる宝の色をした鳥が戯れています。善導大師の姿は、腰から下は金色、上は墨染です。夢から覚めた後、絵師の乗台に命じて、夢に見たことを描かせたそうです。四月、清浄華院での御忌法要にて「二祖対面」オペラ公演が奉納されます。

一味誌再々刊　　第 49 号



信仰の信は「いのちが永遠であることを信じ確信すること」、信仰の仰は、「仏の真を仰ぎいただくこと」と、自らの体験に基づいて語らせてもらっている。念仏を通して、「まこと」をいただいたならば、「み旨現す身」とならせていただける。そこには、必ず「しるし」が現れるだろう。

熊谷直実という、法然上人の弟子となった蓮生が念仏を称えると、庭に蓮の花が十本現れ、咲きだしたという…。そのような「しるし」は望むべくもない。しすし、観智院先々代、土屋観道上人が、信者たちに「これが今、私が到達したお念仏です」と「南無阿弥陀仏…」を称え始めてしばらくすると、集まった信者の中からすすり泣きの声が聞こえだし、全体に広がっていったという。すばらしい「しるし」である。

観道上人の念仏は、「自惚れの天狗鼻」が断ち切られた、自利・利他の真をいただいた念仏に到達しておられたからだろう。

先日、朝の勤行後の座談の中で、「おっさんがボロクソに言っても、あんたがボロクソに言ってはならない…」という発言があった。「それはどういうことだ…」と私。ここでは、そのときのやりとりの内容からは離れて、私が言った過去の発言を見つめなおしてみた。

僧侶たるものが「ボロクソに言う」などとは、穏やかなことではない。しかし、事実私の発言は、「ばかたれ…、何を考えとんのや。本気で念仏しとんのか。何べん言うたら分かるんや。アホたれ。出直してこい。帰れ」と、こんな発言を、これまで何度かしてきているのだ。勢いで、あまり考えてこなかった。今回「ボロクソ」と言われてみて大いに反省。

誰かのご都合主義的な、自分勝手な自尊心を叩き潰そうとした発言のつもりなのだが…。私の発言が「自惚れが出たら、それが、とまり」となってしまっていては元もこもない。驕慢の心、慢心は恐ろしい。「そんなことは断じてあり得ない」と言い切ることのできない発言はしないことである。これを肝に銘じていきたい。南無阿弥陀仏。

慶蔵院ホームページ：http://www.keizouin.com/　をご覧下さい